・・・リリなのの世界に転生？リリなのってなに？

アーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
・・・リリなのの世界に転生？リリなのってなに？

【Ｎコード】
Ｎ５８０７Ｘ

【作者名】
アーク

【あらすじ】
神様のミスで死んでしまった主人公は魔法がある世界に転生させてもらった・・・。

Ｓｔｓに突入！！

っというテンプレですが超亀更新＋文才無い作者が執筆するなのは×ドラクエお楽しみください！
ってか原作知識ないという設定がどっか吹っ飛んでいった気がする

んだよね

ぷろろーぐ（前書き）

初投稿です

ぷろろーぐ

???side

・・・目の前に土下座している男の人がいます。

男の人「本当に申し訳ないです。」

――いやだからなにがどうしたんですか？そしてここどこですか？

男の人「ここは転生の間で、俺は転生を司る神なんだけど俺のミスで書類が燃えちゃって・・・、でその燃えた書類にかかれてた人が死んでしまい、その死んでしまった人があなたなんです。」

へぇー神様・・・って私の書類が燃えたってことは・・・？

――・・・てことは私死んだの？

神「はい・・・、でお詫びにあなたを転生させたいんですが、いかがです？」

転生か・・・元の世界に転生できるのかな？

――・・・うーん、前世に未練ないし・・・まあ転生しますよ。ついでにミスは誰でもあることですし許します。というか元の世界に転生はできるんですか？

神「元の世界には無理ですが、元の世界にあった、ゲーム、アニメなどの世界には転生ができます。」

――んーじゃあランダムでいいので魔法のある世界に転生させてください。魔法を使ってみたかったんですよね。

神「あ、お願いを何個かかなえられますがどうします？」

――お願いかぁ・・・、ならドラゴンクエストの呪文と特技を拾得できるようにしてください。

というか私魔法って言ってもドラゴンクエストのしかしらないんだけどねぇ・・・

神「はい、分かりました・・・できましたよ。あ、それと前世と同じ性別の女になりますから。」

女なら前世も同じだし多分戸惑うことはないよね？

――は～い

神「じゃあ、逝ってらっしゃい。」

――え？なんか字が違わなくないですか？

パカッ！

なんか浮遊感が・・・

――きゃあああああぁぁぁぁぁ・・・・・！

神「さて転生した世界は・・・リリカルなのはの世界か・・・・って
あそこってデバイスないと魔法使うの難しいよね・・・？あの子が
５歳になったら手紙と一緒にデバイスを送りますか。」

神「他の転生者はもっと欲張りなことといっていたけど、あの子は欲
がなかったし、高性能なデバイスをつくりますか！」

主人公設定

主人公

名前：フィア・クローディア

性別：女

年齢：１９歳（Ｓｔｒｉｋｅｒｓ時）

身長：１５７ｃｍ

体重：よ「いっぺん死ぬ？」ゴメンナサイモウシマセン

容姿：金髪碧眼、腰くらいある長さの髪をポニーテールにしてまとめている

魔力量：ＳＳＳ（リミッターつけているのでいつもはＳ）

魔力光：青色

使用術式：スクウェア式　形状ロッド、ソード、

使用デバイス：　ヘレーナ（愛称レナ）スクウェア式専用インテリジェントデバイス、魔法陣は円の中に三角形がある魔法陣

　膨大な演算が必要な魔法（最上級呪文など）があるのでスパコン並みに演算能力がある。

使用魔法：攻撃呪文　メラ　メラミ　メラゾーマ　メラガイアー
（フルドライブ時）
ギラ　ベギラマ　ベギラゴン　ギラグレイド（フルドライブ時）
イオ　イオラ　イオナズン　イオグランデ（フルドライブ時）
ヒャド　ヒャダルコ　マヒャド　マヒャデドス（フルドライブ時）
バギ　バギマ　バギクロス　バギムーチョ（フルドライブ時）
デイン　ライデイン　ギガデイン　ジゴデイン（フルドライブ時）
ドルマ　ドルクマ　ドルモーア　ドルマドン（フルドライブ時）

回復呪文　ホイミ　ベホイミ　ベホイム　ベホマラー
リホイミ（持続的に体力回復）

補助呪文　スカラ　スクルト　ピオラ　ピリオム　バイキルト　バイシオン
マジックバリア　トリック（マヌーサ＋メダパニ）　ラリホー　ラリホーマ　マホトーン

そのほか　ルーラ　リメミト

特技　火炎斬り（メラ）　氷結斬り（ヒャド）　真空斬り（バギ・ドルマ）
稲妻斬り（ギラ・デイン）　ホーリーエッジ（イオ・デイン）

ダークスパイク（ドルマ）　烈破斬り（イオ）
以上７つは各対応する属性呪文を宿してきりつける
ギガスラッシュ　決戦用剣技？
ジゴスパーク　火炎竜　トルネード　津波（発動
条件：水上のみ）

性格：礼儀正しい女の子、基本的に目上＆年上＆初対面の人には敬語
背が小さいことを少し気にしている
前世では英語がダメダメだったためレナとはじめての会話の
時にテンパった経歴あり

特技と特技の使用属性はＤＱＭＪ２を参考にしてます

主人公設定（後書き）

というわけで設定を投稿。

フィア「決断早かったね。」

まぁねー感想がこなかったし自分で決めちゃった

フィア「というかまだ本編始まってないのにレナの情報載せちゃっていいの？」

いんでね？転生後ちょろっとやったら5歳までキンクリするし

フィア「まあいいけど・・・あんまり亀だと・・・分かるよね？」

善処しますからその膨大な魔力をこっち向けないでくださいお願いします

フィアちゃん〆てー？

フィア「はいはい・・・。こんなダメ作者でも温かい目で見守ってください。後感想書いてあげると作者が大喜びします。」

一話　さてさてどの世界に転生したんだろう？

フィアｓｉｄｅ

・・・うぅ・・・神様のばかぁ・・・

？？？「でかしたぞ、ディアナ！！」

うるさいなぁ・・・

目を開けてみるとおっさんのドアップの顔が

フィ「おぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！（きゃあああああぁぁぁ！）」

おぎゃぁぁって赤ん坊からですか・・・これは授乳とかおしめ変えてもらうっていう羞恥プレイフラグが／／／

ディ「あなたにフィアが驚いてますよ？」

？？？「まあいいだろ、ディアナ。それよりフィアはこの子の名前かい？」

ディ「ええ、この子の名前はフィア、フィア・クローディアよ。」

私の今世の名前はフィア・クローディアか。それよりもこの世界はどんな世界なんだろう？
神様にドラクエの魔法が使えるようにしてくれとは言ったからドラクエの魔法は使えるだろうけど、この世界の魔法もつかいたいなぁ

ーーーピピッ

ん？何の音だろう？

？？？「ちっ、事件か。もう少しわが娘と接していきたいのに・・・・。」

ディ「がんばってくださいね。レイン・クローディア執務官。」

レイ「ああ、いってくる。」

お父さんが仕事に行ったみたいです。・・・そういえばおなかすきました・・・

ディ「フィア、おなかすいたでしょう？ご飯ですよ。」

さすがお母さんいいタイミング・・・ってなんで服をはだけさせて・・・って授乳ですかそうですか／／／

ディ「いっぱいたべて早く大きくなってね。」

・・・あぅ～恥ずかしい・・・／／／

おなかいっぱいになったら眠くなってきた・・・まあ私赤ん坊だからしかたないか・・・

ディ「あらあらおねむなのねぇ。おやすみなさいフィア。」

おやすみなさい、お母さんｚｚＺ

一話　さてさてどの世界に転生したんだろう？（後書き）

フィ「亀＋文才なしの作者ががんばっているようです。」

フィアひどいよ・・・

フィ「そんなこといってる暇があったらさっさと書く！まだ１０００文字も突破すらしてないんだからね！」

ど、努力します。ともかく長文になるように努力していきます。

次回は時間を５年ぐらい吹っ飛ばします。

幼児期って正直何書けばいいか分からないですハイ。

じゃあじｋ「次回もよろしくね！」台詞取られた！

二話　デバイス登場（前書き）

１０００文字突破！・・・ほんのちょっとだけだけどｗ

二話　デバイス登場

フィアｓｉｄｅ

さて転生して５年が経ちました。理由は作者が幼児期に何かけばいいか分からん！とかほざいたせいですが

――こら！メタなこというなｗ

・・・は～い。

――しぶしぶだなおぃ・・・

で、今何やってるのかというと・・・、

朝起きたら青い六角形の宝石が浮いてます。

とりあえず起きますか・・・。

―――カサッ

ん？なんだろう？これは手紙かな？

なになに・・・

神『5歳の誕生日おめでとう。君が転生した世界は魔法少女リリカルなのはの時代だよ。ドラゴンクエストの魔法は君の先祖が持っていたのが先祖帰りで君に身についたってことになってるからね。それとその魔法の術式名はスクウェア式で目の前に浮いてる宝石はデバイスっていう武器だから。話しかければ起動するはずだからがんばってね。あ、あとたぶん原作を知らないと思うけど原作介入してもらうからね。今君がいる世界は原作の平行世界だから自分のすきな様に、納得のいく人生を送ってね。』

魔法少女リリカルなのは・・・？友達から聞いたことあるような気がするけど覚えがないなぁ

それよりもデバイスっていう武器が気になるね。

話しかければ起動するみたいだけど・・・

フィア「お～い。」

??>>Good morning master.<<

・・・あぅ～、英語分からないよ・・・

私がアタフタしてるとデバイスが、

??>>The language in the world which is now is under check. It sets to Japanese・・・Complete.
おはようございますマスター。<<

フィア「お、おはよう 。」

レナ>>私の名前はレーナ、愛称はレナとして登録されています。
そして私の正式名称はスクウェア式インテリジェントデバイスです。
よろしくお願いしますねマスター。<<

フィア「よろしくね？レナ。」

レナ>>はい。待機状態はペンダントとして携帯してください。<<

フィア「分かった。」

ーーーーーーーーーーーー

おなかがすいたのでリビングに行くとお父さんとお母さんがイチャイチャしてた

フィア「おはよう、お父さん、お母さん。」

ディ「おはようフィア。ご飯出来てるわよ。」

レイ「おはようフィア。・・・ん？その胸元のペンダントは倉においてあった奴じゃないか。どうしたんだい？」

フィア「朝起きたら目の前に浮いていたの。それで私がレナ・・・このペンダントはデバイスでね、レナのマスターになったの。それでレナから聞いたんだけど、私の魔法はスクウェア式って言って、先祖帰りで私の魔法の力になったみたいなんだけど何か知ってる？」

レナ＞＞正式名称はヘレーナです。よろしくお願いします。＜＜

ディ「よろしくね？それと多分その術式は私の家計の先祖かもね。私の実家に文献が置いてあって幼い頃に見た記憶があるから。」

フィア「お母さん、その文献って私も見れる？スクウェア式につい

てもっと知りたいし。」

ディ「んーたぶん実家に連絡すれば見れるかも？連絡とって見るわね。」

フィア「連絡取れたら教えてね！・・・おなかすいたしご飯食べよう？」

ディ「じゃあ、朝ご飯食べましょうか。」

三人「「「いただきます。」」」

ーーーーーーーーーーーーー

二話　デバイス登場（後書き）

結構がんばってるんじゃね？私ｗ

フィア「最初だけ・・・とかだったら・・・分かってるよね？」

はいぃ！精進させていただきます！

フィア「まったく・・・、でもこんな駄文を読んでいただきありがとうございます。これからも温かく見守ってやってください。」

次はデバイスの起動と主人公の身体能力とかを予定しています。

フィア「ではまた次回で！」

三話　初めての魔法（前書き）

やっと投稿できた！

フィア「なにやってたの？答えによっては・・・（ニコッ」

プロットデータが飛びまして打ち直してました！（ガクガクブルブル

フィア「まあいいか。それでは本編どうぞ！」

三話　初めての魔法

～ｓｉｄｅフィア～

昼過ぎに自分の部屋でレナと話しているとふと思ったことを口にしてみた

フィア「ねー、私ってドラクエの魔法使えるんだよね？」

レナ＞＞はいそうですが、どうかしましたか？＜＜

フィア「つかってみたい！！」

レナ＞＞一応私を起動しなくても使えますが魔力効率がものすごく悪いので起動を先にしましょうか。＜＜

フィア「はーい。」

レナ＞＞では私の後に続いて起動パスワードを唱えてください。

古より続く魔法使いの血に誓い、＜＜

フィア「えと・・・古より続く魔法使いの血に誓い、」

レナ＞＞自らの大切なものを守り抜く力をここに、＜＜

フィア「自らの大切なものを守り抜く力をここに！」

レナ・フィア＞＞「へレーナセットアップ！！」＜＜

足元から青い光がでてきて私を囲んで・・・、服装が変わった！？

レナ＞＞バリアジャケットは私が設定しました。＜＜

へぇこれがバリアジャケット・・・私の今の服装は、裾が膝上にある白いドレスっぽいものに足首までである青いコート、それにたぶん風を模している柄に青い宝石がついているレイピアが右手にある。腰辺りに鞘もある。

フィア「でも・・・なんでレイピア？」

レナ＞＞それはですね、呪文の各属性を剣に宿して攻撃できるようになっているんです。＜＜

フィア「（質問に答えてない・・・）ほぇー・・・ということはやりようによっては3～4個の属性を合成させて攻撃できるの？」

レナ＞＞できますが・・・リンカーコアの負荷がものすごいですよ？属性同士の相性とかもありますし。あ、あと、基本的に私無しで呪文詠唱しなくても魔法使えますが、私を介して無詠唱や私を介し

て詠唱するのと比べると威力が落ちますね。まぁでも魔力にものをいわせるとかは話が別ですが。＜＜

ドラクエの呪文って負荷があるんだ・・・。というかリンカーコアってなんだろ？

フィア「へぇー・・・あ、でも剣を杖として詠唱するの？」

レナ＞＞いや儀式魔法や詠唱する余裕がある場合は私を変形してモードを変えて魔力効率を上げることが出来ます。杖に変形する場合はモードロッドで変形できます。またレイピアにはモードブレードです。ちなみに起動時はいつもブレードモードです。＜＜

フィア「まあ練習して覚えていけばいいかな。・・・とりあえず魔法使いたいから使っていい？」

と、空き缶を切り株の上に置きながら言うと、

レナ＞＞はい、分かりました。どの呪文を使いますか？＜＜

フィア「とりあえず初歩的なメラで。」

レナ＞＞詠唱は自分で決めてください。＜＜

フィア「わかったー・・・。炎よ！」

空き缶を狙ってメラを撃ってみると空き缶からそれて地面に当たった。

フィア「やったーー！！魔法が使えた！！命中はしなかったけどうれしい！！」

レナ＞＞百発百中になるまで練習しましょうね？＜＜

フィア「うん！！」

レナ＞＞日も落ちてきてますし今日はこれくらいにしましょう。＜＜

・・・ほんとだ。あたりがオレンジ色にそまってるや。

レナ＞＞明日からビシバシ基礎能力を高めていきますからそのつもりで。＜＜

フィア「は～い。」

・・・リンカーコアのこと聞くの明日でいいか・・・。

～side　out～

三話　初めての魔法（後書き）

というわけで遅れてすいませんでした！！（ジャンピング土下座

フィア「なんでデータ飛んだの？」

保存せずにメモ帳切ったっぽいです・・・ｏｒｚ

フィア「バカでしょ・・・。こんなバカな作者の駄文でも今後もよろしくお願いします！」

四話　キングクリ（ｒｙ

～ｓｉｄｅフィア～

いきなりですがレナを起動してからさらに5年たちました。

――キングクリムゾン！！

・・・なにいってるんだろうかこの駄作者は・・・スルーがいいよね・・・

――あ、まってｗスルーしないでｗ

で、私はいまなにをやってるのかというと・・・、

レナ＞＞マスター、集中してください。制御が乱れています。＜＜

フィア「あ、ごめん。」

メラを２０個ほど展開してそれの長時間維持をしています。これが意外と大変で・・・

ーーードゴンッ！！

あ、３つほど制御から離れてあらぬ方向に飛んでいって地面に当たった・・・

レナ＞＞１５個ならまだ制御できますが・・・、これ以上は無理ですかね・・・？＜＜

あ、ちなみに誘導弾はメラ系、無誘導弾はヒャド系になってます。中級呪文までなら無詠唱ができますが上級と最上級は詠唱が必要で・・・、レナがいないと魔力を思いっきり持ってかれます。儀式魔法は負荷がものすごいから１５歳までは呪文覚えるだけみたいです。剣技は我流剣術に組み込んで練習中です。」

レナ＞＞なにいってるんですか？マスター。＜＜

フィア「え？声に出てた？」

レナ＞＞はい。バッチリと。＜＜

・・・は、はずかしいぃ・・・／／／／

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

練習を終えて家に帰ってくると・・・

???「がう!!」

ちっちゃいトラが飛び掛ってきました。

フィア「ちょっと!落ち着きなさい、レオ。」

2年ほど前にレナが、

レナ>>今日は使い魔を召喚しましょう。<<

と、突然言い放って使い魔を召喚したら、ベビーパンサーがでてきました。とりあえず、ものすごく懐かれたのでレオという名前をつけて可愛がっています♪

それにしてもこの子キラーパンサーに成長するんだろうか・・・?

成長するなら陸での機動力がすごいとおもうなぁ・・・

レオ「がう！」

ーーーピカッ！！ボフンッ！！

え？レオがいきなり発光して人型に・・・

フィア「え？え？ふぇぇぇぇぇ！？」

レオ「ご主人の魔力ちょっともらって変身できた♪」

レオの外見は7歳くらいの男の子で髪は赤くてちっちゃいとさかみたいになってる。顔は無邪気そうな笑顔を浮かべている・・・かわいい／／／／

レオ「改めてヨロシクね？ご主人。動物モードだといえなかったの。」

フィア「うん。よろしくね。」

～side　out～

四話　キングクリ（ｒｙ（後書き）

時系列的にはＡ' ｓ終わってるよ～

フィア「キンクリで飛ばすとは・・・さすが駄作者」

ひどい！

フィア「というかレオが登場＆擬人化って・・・」

つい魔が差して・・・テヘ☆

フィア「気持ち悪い！！」

ガーン・・・・――――

フィア「作者が落ち込んだけどまあいいか。ご意見ご感想お待ちしております♪」

五話　空港火災（前書き）

というわけでまたまたキングクリムゾンです・w・

フィア「メラガイアー！！」

ぎゃぁぁぁぁぁぁぁっ

フィア「まったく・・・それではどうぞ！！」

五話　空港火災

～ｓｉｄｅフィア～

今私は空港にいます。

ーーードゴォォォォォォンッ！！

レナ＞＞プロテクション＜＜

おっとあぶないあぶない。

なんでこんなことになってるのかというと・・・

私がミッドに用事があって自分の出身世界からミッドに来る

←

何かが爆発した音がする

←

火災発生

←

私は近くにいた一般人にオクルーラをつかって助ける

←

ほかに人がいないか探す　↑いまここ

あらかた探し回って助けたからもう居ないとおもうんだけど・・・

なんかまだいるような気がするんだよね

『ぐすっ…熱いよぉ…』

子供の泣き声！？・・・こっちか！！

イオで子供に当たらないように周りを飛ばすと、青い髪の女の子がいた

フィア「大丈夫？」

『ぐすっ…お姉ちゃん…誰？』

私は女の子と目線をそろえるようにしゃがむと

フィア「私は君を助けに来たんだよ、・・・この熱い中良く頑張ったね。」

そう言って頭を撫でてやると少しだけホッとした表情を浮かべた

っとここは崩れそうだな・・・さっさと逃げようかな

フィア「転移するからしっかり掴まっててね。」

女の子がコクッと頷いたのを確認して女の子を抱き上げ詠唱する

フィア「我を光の下に・・・リメミト！」

空港の外の人のいないところに転移する

フィア「ねぇ、君、名前は？」

女の子「スバル・・・」

フィア「スバルちゃんだね・・・私は・・・って眠っちゃったか」

安心した様に腕の中で眠るスバルちゃんの頭を撫でながら空港の外を歩いてると

???「スバル!!」

声がしたので振り返ってみると壮年の青年がいた。

???「俺はゲンヤ・ナカジマ、その子の父親だ。」

フィア「そうですか。空港から私が見つけて転移で出てきました。」

ゲンヤさんにスバルちゃんをわたしながらいうと

ゲンヤ「ありがとう。・・・えっと、」

フィア「あ、私はフィア・クローディアです」

ゲンヤ「フィアさんありがとう。」

フィア「いえいえ・・・火災がやばいかな・・・ちょっととめてきます」

ゲンヤ「え!?おい!!」

ゲンヤさんが静止を呼びかけたけど気にしない。

フィア「ゲンヤさん、大規模広域魔法使うので退避させてください。これが範囲です。」

レナにいってマヒャデドスの範囲を見せる。

ゲンヤ「・・・わかった。＞全員に通達！！大規模広域魔法が飛んでくるぞこの範囲外に退避しろ！！！＜」

ゲンヤさんが通信してるうちにロッドモードに変えて魔法陣を張り巡らせる。

フィア「フルドライブ！！・・・すべてを凍らせ！氷の刃よ！マヒャデドス！！」

空から無数の氷の刃が降り注ぎ炎を押しつぶして消火する！！

フィア「こんなものかな・・・」

ゲンヤ「すげぇな・・・協力感謝する。」

フィア「では私はこれで・・・ルーラ」

転移する時に何か言ってたけど気にしない。

～side　out～

六話　ミッドでの幼児・・・じゃなかった用事（前書き）

フィア「消えろ作者！！」

ちょｗｗまだそれ設定段階の呪文ｗｗｗｗｗ

フィア「問答無用！！！」

ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・

六話　ミッドでの幼児・・・じゃなかった用事

～ｓｉｄｅフィア～

さて・・・、巻き込まれたから救助したけど、管理局に見つかると説明とかで面倒なことになりそうなんだよね・・・。だから転移で逃げたんだけどね。

フィア「ん？」

なんか青いボディラインにぴっちりしたスーツ着てる女の子がアタッシュケース運んでる・・・。

・・・まあスルーでいいかな。

フィア「レナ、あたりに管理局員の魔力反応ある？」

レナ＞＞少しお待ちを・・・、サーチャーが周りを飛んでますね。私たちを監視してるっぽいですがどうします？＜＜

どうしようかな・・・。あ、そうだ。これ試してみるかな。

フィア「（レナ、威力を極限まで減らしたイオでフラッシュ起こしてその間にルーラで逃げれる？）」

レナ＞＞（ちょっとまってください・・・。実現可能です。）＜＜

さてと、逃げ出す方法も分かったしさっさと逃げようかな。

フィア「・・・光よ！イオ！（ボソッ」

――カッ！！

閃光が周りを照らしているうちにルーラを詠唱しないと・・・

フィア「我の思う場所へ！ルーラ！」

私がおもっていた場所のクラナガンの中央にある人気のない公園に転移する。

フィア「ふー・・・。まだ管理局とは関わりたくないしね・・・裏

で黒いことやってるし私のことばれるとモルモットにされそうだし・・・。」

レナ＞＞そういえば今回ミッドに来たのは、陸士訓練学校に通うためでしたっけ＜＜

フィア「そだね。父さんのコネでミッドで部屋を借りれたし・・・がんばらないとね。」

レナ＞＞【陸士訓練学校いかなくても十分強いのですがね】＜＜

フィア「どうしたのレナ、急に黙ったりして。」

レナ＞＞いえ・・・、少し気になることがありまして。陸士訓練学校でスクウェア式を使うのですか？＜＜

フィア「そのつもりだけど・・・、どうかしたの？」

レナ＞＞いえマスターの術式が珍しいというか特殊なので公にしていいのかと・・・。＜＜

フィア「あ。」

レナ＞＞忘れてましたね・・・マスター。＜＜

フィア「いや忘れてたわけじゃ・・・」

レナ＞＞ではなんでどもってるんですか＜＜

グハッ！・・・あぅ～正直に言おう・・・

フィア「すいません。わすれてました。」

レナ＞＞まあいいです。こんなこともあろうかとミッド式が私で使えるようにお父様にソフト入れてもらいましたから＜＜

フィア「父さんいつの間に・・・、でもありがとね。また今度あった時にお礼言わないと。」

レナ＞＞仕様マニュアルもありますし訓練学校入学まで時間がありますから基礎をみっちりとやりますよ？マスター＜＜

フィア「あはは・・・お手柔らかにお願いします・・・」

レナ＞＞善処します・・・！？　管理局員の魔力反応を感知！！空から飛んできます！！＜＜

フィア「え！？・・・レナ魔力隠蔽Ｂランクまでかけて」

レナ＞＞了解しましたマスター。視認距離にはいりました。＜＜

フィア「あれは・・・だれだろ？」

みえたのは、金髪ツインテールに黒いバリアジャケットを身に着けた女の子だった

フィア「フェイト・T・ハラオウンだと・・・レナ、ステルス最高レベルで展開」

レナ>>了解しました<<

フェイトさんがさっきまでいた地点の上空に到着すると

フェイト「だれもいないね・・・バルデッシュ反応は？」

バル>>ありません、サー<<

と話していた・・・。感知されてないみたいだし物音立てずに逃げますか。

～side out～

六話　ミッドでの幼児・・・じゃなかった用事（後書き）

フィア「作者はなぜか黒焦げてるので今回は私と」

レオ「ボクでやるよ～！」

フィア「相変わらずのgd gd感・・・あとでもう一発食らわせるか・・・」

レオ「作者さん大丈夫かな～」

フィア「まあ大丈夫でしょ。じゃあ締めるよレオ」

レオ「うん！まったね～～！！」

七話　昇格試験（前書き）

というわけで陸士学校はすっとばしました。それではどうぞ！

七話　昇格試験

～ｓｉｄｅフィア～

新暦７５年ミッドチルダ。

試験を受けるためフィアは廃ビルの上にいた。
今は試験を受けている二人組が終わるのを待っているところで、どうやらその二人は残り数秒の所でゴールしたようだった。

フィア「いよいよ、だね。」

レナ＞＞ええ、ミスしないようにして下さいね、次の試験は半年後ですから。＜

フィア「はいはい」

レナ＞＞はいは一回！・・・始まるようですね＜＜

レナがそういうとフィアの前に大きなモニターが出てくる。モニターには一人の女の子が映っていた。

？？？「こんにちは～本日の試験官を勤めさせていただくリィンフ

ォースツヴァイ空曹長です。よろしくですよ～」

フィア「よろしくお願いします」

リイン「フィア・クローディア二等陸士。保有している魔導士ランクは陸戦Cランク、本日受験するのは陸戦魔導士Bランクへの昇格試験で間違いないですよね」

フィア「間違いないです」

リイン「フィア三等陸士はそこからスタートして各種に設置されたポイントターゲットを破壊、もちろん破壊してはダメなダミーターゲットもありますからね、妨害攻撃に気をつけて全てのターゲットを破壊、制限時間内にゴールを目指して下さいです。何か質問は？」

リィンフォースツヴァイ空曹長が淡々と試験の説明をしていく。

フィア「ありません」

リイン「それではゴールを目指して頑張って下さいね」

そう言い終えるとモニターの画面が変わりスタートまでのカウントがされていって・・・スタートの合図がなった。

フィアはすぐに走りビルから飛び降りると同時にレナをセットアップした。

フィア「ロッドモード！！」

レナ＞＞了解しました＜＜

次の瞬間フィアの手には身の丈ほどの大きな杖が現れ、服装が青をベースにしたバリアジャケットになった。
そして、空中で詠唱する。

フィア「かの者に風の加護を！ピオラ！！炎よ！メラ！！」

ゴォォォオオオオオ！

フィアが加速魔法と火の玉を２０個ほどだす。フィアの速度は段違いに上がり火の玉の一発一発が無駄なくターゲットに当たる。しかし、ダミーターゲットには当たってはいなかった。

フィアは一度もとまらずにさらに加速魔法を使っていく。

派手な行動をしたので、ターゲットがフィアの存在に気づき攻撃してくきたがフィアが速過ぎて当たらない。フィアが走りながらレナをロッドモードからブレードモードに変形させ、魔力刃を発生させる。

ビルにいるターゲットに向かって走る。フィアが速過ぎて捕らえられないためターゲットからするとかなり当てにくい敵だろう。
フィアは、自分に当たりそうな攻撃だけを弾きながら、ビルの中に入る。

フィア「真空斬り！」

そう呟くと、レナの魔力刃に風が纏い付く。

フィア「はぁ！！」

フィアがレナを振るうと次の瞬間ターゲットは、全て破壊された。

フィア「こんなものかな、レナ索敵よろしく」

レナ＞＞了解しました＜＜

といいながらも、フィアは風でターゲットをなぎ払う。・・・ダミーに当てずに。

フィア「さて、ここもミス無しにクリアでいいかな」

レナ＞＞次はこの上です＜＜

フィア「確か集中砲火がくるんだっけ」

この上の場所はなかなかの難問で、今までの受験者は必ず迂回するのが当然だったという。

フィア「よし、突っ込みますか、レナ、トリック」

レナ＞＞機械をだませればいいんですね。・・・準備できました＜＜

フィア「彼らに惑いを・・・トリック！」

呪文を詠唱しながら飛び出す。そしてターゲットが見える位置まで上がると、ターゲットはすぐにフィアに気づき一斉射撃をしてくるが、フィアには当たらず、幻影に当たる。レナが索敵しているので相手の居場所が分かる。

フィア「氷の刃よ！ヒャダルコ！！」

ダミーターゲット以外のターゲットは全て氷の刃に撃ち抜かれ撃破された。

フィアはターゲットがいないことを確認すると走り出した。

この試験を見ている人物がリィンフォース以外にも五人いた。
まずヘリの中から映像を見ている、フェイトとはやて。フィアの前に試験を受けていた二人。そして、なのはだった。
彼女達は、ちょっと・・いやかなり驚いていた。

フィアの前に試験を受けていた二人は陸士学校で見た記憶があるが地味だったためこの映像を見て驚いていた。ほかの三人は面識がなかったため撃破速度をみてかなり驚いていた。五人は、試験の映像から目が離せなくなっていた。

少し走ると、太陽の光がまぶしい場所へ出た。

レナ＞＞マスター、エネルギー反応が＜＜

レナがそう言った瞬間ビルの中から、エネルギー弾が出てきた。なかなか大きく、当たったらかなりのダメージがくる。

それをフィアが跳んで避ける。

レナ＞＞索敵・・・かなり遠くに大型スフィアがあります。＜＜

フィア「面倒だねぇ・・・メラゾーマいくよ！」

レナ＞＞面倒って・・・まあいいです、魔力循環補佐機能作動！＜＜

フィアの足元にスクウェア式の魔法陣が回転しながら大きくなっていく。

フィア「爆炎よ！・・・喰らいなさいメラゾーマ！！」

半径１ｍ以上もある巨大な火の玉が最近導入されたという大型のスフィアに向かって飛んでいく。

ドゴォォォォオオオオオオオオオン！！！

スフィアはバリアを張ったようだが圧倒的な火力によりバリアが一瞬で消滅しスフィアが破壊された。

フィア「レナ残り時間は？」

結構時間を使ったかなとおもっているフィアはレナに慌てて聞いた。

レナ＞＞時間の余裕がありすぎます。普通に走っても大丈夫です＜＜

それを聞いたフィアは安心してコースに戻った。後は、ただ走るだけだ。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

七話　昇格試験（後書き）

ふーがんばった。

フィア「結構文字数いったね」

まぁね、あ、フィア、君に家族が増えることが決定したよ

フィア「・・・詳しくオハナシしようか」

ちょそれ決戦奥義・・・ギャァァァァアアアア！

フィア「来週もよろしくお願いします」

八話　試験後と新部隊の誘い・・・・？

～ｓｉｄｅフィア～

私は今とある地上本部のロビーにいます。試験？普通に時間内にはゴールしたよ？

で、今ロビーにいるのが・・・、

？？？「部隊名は、時空管理局本局遺失物管理部、機動六課」

？？？「登録は陸士部隊。ＦＷ陣は、陸戦魔導士が主体で、特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

といって、新部隊の説明をしてるさっきの試験の試験官だったリインフォースツヴァイ空曹長と関西弁が目立つ八神はやて二等陸佐、それに横でニコニコしてるフェイト・テスタロッサ・ハオラウン執務官とさっき私の前に試験を受けていたスバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士と私の６人（でいいのかな？）スバルとティアナは同期だったし面識はなかったけど話をする時間はあったから自己紹介はしたよ

フィア「遺失物・・・ロストロギアねぇ・・・」

スバルは分かってないみたいだけどティアナは六課の仕事が分かったようだね

はやて「広域捜査は、一課から五課までが担当するから、うちは対策専門」

はやて「本題は、ここや。スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士、それとフィア・クローディア二等陸士」

「「「はい」」」

三人は、名前を呼ばれたので返事をする。

はやて「私は三人を機動六課のＦＷとして、迎えたいと考えとる。厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる。どないやろう？」

レナ＞＞（やっぱり新部隊への誘いでしたね。）＜＜

フィア「（みたいだね）」

レナ＞＞（受けますか？）＜＜

フィア「（受けてもいいんだけど・・・なんか隠してそうなんだよね）」

レナ＞＞（どうするんですか？）＜＜

フィア「（断る理由がないから受けるよ）」

はやて「スバルは、高町教導官に魔法戦を直接教われるし」

フェイト「執務官志望のティアナには、私でよければ、アドバイスとかもできると思うし」

はやて「フィアは、基礎が出来てるから実戦が沢山できると思うから、レベルアップができる」

フェイト「どうかな？」

それぞれの利点を言うフェイト。

ティアナ「とんででもない・・というか、恐縮です、といいますか」

ティアナが三人の代表として意見を言う。余りにも良い話だったので、ティアナの声は少し裏返っている。

？？？「えーと、取り込み中かな？」

オフィスの方からなのはが来た。手にはいくつかの書類を持ってお

り、試験の結果などが書いてあるのだろう。

はやて「平気やよ」

はやてが、なのはに答える。

なのはは、フィア達が座っている反対側に座り、試験の結果を言う。

なのは「まず、二人から。二人とも技術はほぼ問題なし。でも、危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを越えています」

なのはは淡々と結果を言いその後に、少し説教をする。二人も不合格と判断して、顔を俯かせる。

なのは「だから、二人共残念ながら不合格・・・なんだけど」

「「え？」」

予想外の言葉に、二人は同時に顔を上げる。

なのは「二人の魔法値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク扱いにして置くのは、返って危ないかも。と、いうのが私と

試験官の共通見解」

なのは「ということでこれ」

二人の前に書類が出された。

なのは「特別講習に参加するための申請用紙と、推薦状ね。これを持って本局武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目には、再試験を受けれるから」

書類の説明をして少し厳しく、しかし優しくなのはは、言葉を告げる。スバルとティアナの表情が明るくなった。

なのは「でフィアなんだけど・・・、独自術式使ってるから判断がしにくかったけど、魔力値はA並みにあるし技術も完璧、クリアタイムも過去最速だから問題なし」

なのは「というわけで合格！」

フィア「ありがとうございます！」

と、フィアがお礼を言ってると突然スクウェア式の魔法陣が現れる。

はやて「な、なんや！」

フィア「あ、わすれてた。おいで？レオ」

魔法陣から全長３ｍぐらいの虎らしきもの・・・キラーパンサーのレオが現れる

フィア「この子は使い魔です。八神二等陸佐。レオ？擬人化」

レオが光に包まれ人型になる

レオ「ご主人～～！忘れるなんてひどいーー！！」

フィア「ごめんね？」

フィアはレオをひざに置きながらあやまる（レオは１２０ｃｍくらいなのでひざにおいても邪魔にならない）

スバルは「かわいい！！」とかいっているのを他の５人は苦笑いしながらみていた。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

八話　試験後と新部隊の誘い・・・？（後書き）

ふーつかれた。一度ブレーカが落ちてあせった

九話　六課始動！（前書き）

というわけでがんばりました。

フィア「いいの？作者、プロット使っちゃって」

んーまあね、テスト期間で暇だったし

フィア「勉強をしろ・・・それではどうぞ！」

九話　六課始動！

～ｓｉｄｅフィア～

フィア「はぁー・・・」

私は広い駅のホームでため息をつきながら人を待っていた

どうしてこうなったかというと・・・

～回想～

――六課始動当日

私が自分の家で寮生活の準備をしてると通信があって

フェイト「ごめんね、フィア。私が保護してる子達を駅まで迎えにいってくれない？私急用で向かいにいけなくて・・・」

フィア「いいですけど・・・、名前と顔写真くれませんか？それとその子達にも私の顔写真送っておいてください」

フェイト「・・・送ったよ。頼まれてくれてありがと」

フィア「いえいえ、どうせ駅の近くに住んでましたから」

フェイト「じゃあ、おねがい！」

～回想終わり～

ということがあって、その子達を駅の改札口出口で待ってるんだけど・・・

フィア「もう電車到着してるのに・・・こない」

というわけでため息をはいてました

???「あの、すいません」

フィア「ん？」

振り返ってみると赤い髪の私服の男の子がいた。・・・うんエリオ君っぽいね。

フィア「エリオ君かな？」

???「はい！エリオ・モンディアル三等陸士です！」

フィア「もうひとりの・・・キャロちゃんは一緒じゃないのかな？」

エリオ「この駅ひろいですから多分迷子になってるのかなと・・・探すの手伝います！」

フィア「んー・・・探し出さないと・・・エリオ君、１０分たったら一度ここに戻ってきてね」

エリオ「はい！」

そういってエリオ君はタタッと駆けていった。さて私も探すか・・・特徴はピンク色の髪か・・・

それから5分くらい見渡してるとピンク色の髪の毛をした女の子がこちらに向かってきてるのを見つけた

フィア「（エリオ君、見つけたから戻ってきて）・・・君がキャロちゃんかな？」

？？？「はい！キャロ・ル・ルシエ三等陸士です！」

エリオ君も戻ってきたしそろそろいくか・・・

みんなで駅から出ると、

フィア「フェイトから転移魔法の許可貰ってるから六課まで飛ぶよ

？荷物しっかりと思ってね」

「「はい」」

2人がしっかり荷物持っているのを確認してから2人の手を握り、私の前面に魔法陣をだした

フィア「レナ、サポートよろしく、・・・対象3人長距離転移モード、我の思う場所へ！ルーラ！」

フィア「っと、到着」

キャロ「すごいですフィア二等陸士！」

エリオ「フィア二等陸士の術式ってミッドとベルカどっちとも違ってましたよね？」

フィア「私のは血縁遺伝の術式だからね。それと役職つけなくていいよ。」

エリオ「いいんですか？」

フィア「私堅苦しいの嫌いだしね」

キャロ「じゃあ・・・フィアさん？」

フィア「なに？キャロちゃん」

と和やかに話しながら隊舎に入っていた

隊舎での式を終えるとＦＷ陣は記念すべき六課での初の訓練を受ける為、訓練着に着替えてから訓練場に移動した

訓練場につくとなのはともう一人女性がいた

？？？「え～、機動六課のメカニックデザイナー兼通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。みんなはシャーリーって呼ぶのでみんなもそう呼んでくださいね。みんなのデバイスの改造をしたり調整したりもするので時々みんなの訓練を見せてもらったりもします」

そこでフィア達5人はなのはと一緒に訓練を見に来ていたシャーリーの自己紹介を受けていた

シャーリー「あ、デバイスについての相談とかもあったら遠慮なく言ってね」

「「「「「はいっ！」」」」」

なのは「それじゃあ、自己紹介も終わった所で早速、訓練を始めよっか」

スバル「えっ？」

ティアナ「あの、ここで・・ですか？」

なのは「クスッ、シャーリー」

まぁ、４人が不思議そうにするのも無理はない。訓練スペースと言っても海の上に広範囲にわたって足場があり、そこと陸を細い通路が繋いでいるだけだ。ティアナがなのは尋ねるとなのは待ってましたと言わんばかりに小さく笑うとシャーリーに振る

シャーリー「機動六課自慢の訓練スペース、なのはさん完全監修の陸戦用空間シュミレーター、ステージセットっ！」

シャーリーが説明しながら操作盤を操作していく。すると、今まではただの足場だった筈のそこが瞬く間にビルが立ち並ぶ都市に変化していき、４人は驚きを隠せずに居た

ちなみに私は知ってたから驚かないよ？４人はぽかんとしてるけどね

そして訓練スペースに移動した一同、４人とも珍しそうに周りのビル群を見渡してティアナは実際にビルの壁に触ったりしてそれぞれ、

感嘆の声と仕組みについての予想を口にしていた

なのは「よし、っとみんな聞こえるー？」

その時、ビルの屋上で５人の様子を見ていたなのは念話で５人に呼びかける。

なのはが目で合図を送るとシャーリーは軽く頷いて操作盤の上に指を走らせる。六課の一番最初の訓練はまずは彼らの実力や欠点を測るためのターゲットを使っての実戦訓練。

シャーリー「動作レベルＣ、攻撃精度Ｄって所ですかね？」

なのは「私達の仕事は捜索指定のロストロギアの保守管理。その目的の為に私達が戦う事になる相手は・・これ！」

フィア達の前に魔方陣が現れ、その中から楕円形・・と言うよりはカプセル薬の形をし、その中心にカメラアイが付いてる機械が姿を現した

なのは「自立行動型の魔導機械、これは接近してくると攻撃するタイプね。攻撃は結構鋭いよ。それじゃ、機動六課最初の模擬戦訓練。ミッション内容は逃走するターゲットの全機破壊、もしくは捕獲、を１５分以内」

説明が終わると直ぐに5人はそれぞれ、身構える。キャロとティアナは少し後ろに下がり、フィア達三人が少し前に出る

シャーリー「それでは・・・」

なのは「ミッション・・・スタート！！」

なのはとシャーリーの合図と共に8体の機械は5人に背を向け一斉に逃走を始めた

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

九話　六課始動！（後書き）

えーと次回はフィアの魔法が炸裂！

多分日曜に更新できる・・・とおもう！

十話　最初の模擬戦（前書き）

うーん三人称にプロット段階で挑戦したけどむりだった・・・orz

十話　最初の模擬戦

～ｓｉｄｅフィア～

一番ガジェットに近いのは、スバル。ローラーの機動力を使い追跡する。ガジェットの群の中に魔力弾を放った。が、当たらなかった。見かけからはとても考えられないスピードで回避したようだ。

スバル「なにこれ？動き速！？」

ガジェットは、あっという間に、スバルの視界から出る。逃げた先に居たのは、エリオだ。

ガジェットが、エリオに向けて魔力弾を撃ったけどエリオ君はそれを跳んでかわして魔力刃を出して攻撃する。でも、不規則に動くガジェットにその攻撃は当たらなかった。

フィアはガジェットをよく見ながら魔力弾を放つが・・・

フィア「フィールド系！？」

フィアは自分の魔力弾がかき消されたのにすこし驚きながらみんなに念話をした

フィア「（みんな！この機械たぶんＡＭＦ持ってる！）」

その念話を聞いていたなのはとシャーリーはある会話をしていた。

シャーリー「フィアさんは状況判断が早いですね」

なのは「にゃはは、説明しなくても良いみたいだね」

なのはは仕事が取られて悲しいような、曖昧な顔をしながらも皆を見守る。

ガジェット達の逃走方向の近くのビルに、ティアナとキャロは居た。

ティアナ「取り敢えず様子見のために一発強いのを・・・ちびっこ威力強化お願い」

ティアナは魔法無効果能力を越える一撃を撃つためにデバイスの銃口に魔力を集めていた。

キャロ「はい、ケリュケイオン」

キャロがデバイスの名前を言うと、グローブ状のデバイスが光った。すると、ティアナの魔力弾が更に大きくなった。

ティアナ「シュート」

かなりの速さのある大きい魔力弾が放たれた。ガジェット達は移動するのを止め、一機のガジェットを中心に集まる。ティアナは、魔力弾をその中心に行かせる。けど、全てのガジェットが一気にＡＭＦを発動し、魔力弾を消した。

「「「そんな」」」

フィアと、ティアナ以外のメンバーが叫ぶ。ふとフィアがティアナを見るとティアナは、微かに笑っていた。

うーん、質量で押しつぶせばいけるかな・・・？

フィアはどれを使って破壊するかを考える。

フィア「ちょっと時間稼ぎお願いしていい？」

「「了解」」

前衛２人が返事をした。ガジェットの群をスバルが追いかける。そ

の、進行方向の橋の上にエリオがいる。

「ストラーダ、カートリッジロード！」

「潰れてろ！」

その一機に向かってスバルは、おもいっきり拳を叩きつけた。でも魔法無効果能力を使い衝撃を和らげるガジェット。やっぱり魔力を封じられると威力がでないようだ。

「そんなら」

後ろにいるガジェットを蹴りで叩きつけ、マウントポジションになる。そして、右手に付いているリボルバーナックルで殴る。

ドガァァァン

ようやく一機撃破。

キャロ「フリード、ブラストフレア。ファイア」

キャロの召喚獣フリードが、炎を吐き出す。ガジェットの進行方向に向かって吐き出させたキャロ。ガジェットは、それを回避し別の道に入っていった。

キャロ「フィアさん、そっちいきました」

実はさっきの攻撃はティアナがキャロに、わざと当たらない用に攻撃させたのだ。理由は勿論誘導させるため。
キャロの攻撃では、全機破壊できないと判断したので、誘導に使ったのだ。そして、全員は地上で魔法陣をめぐらしてるフィアに視線を移した。

フィア「（ありがと。巻き込む気はないけど一応巻き込まれないようにしてね？）」

フィアは魔力を練り上げながらお礼をいい、その魔力を解き放った

フィア「輝け！閃光よ！イオナズン！！」

解き放たれた魔力が光となり目の前にいたガジェット5機を爆散させた

フィア「（まだ2機残っているよ。ティアナがいる方に向かってるみたい）」

フィアがまだ2機残ってたことに気づきそれを報告する

ティアナはガジェットを見つけたようだ。

ティアナ「こちとら射撃型。無効化されて、はいそうですかって下がってたんじゃ生き残れないのよ」

銃口を移動するガジェットに向け二発のカートリッジロードをし、魔力弾を作る。

ティアナ「（スバル、上から仕留めるから、そのまま追ってて）」

スバル「（了解）」

魔力弾を作るティアナを見てシャーリー疑問に思ったようだ。

シャーリー「魔力弾？ＡＭＦがあるのに？」

レイジングハート（以降レイハ）＞＞いいえ、通用する方法があります＜＜

なのはの首にかけてあるレイハが答える。それに頷くなのは。

なのは「攻撃魔法の弾を無効果フィールドに消される前に膜状バリアをフィールドを突き抜けるまで持てば、本命の弾が、ターゲットに届く」

ティアナは魔法弾を包む膜を作っていた。かなりの技術が必要のようで包むだけにでも凄い神経を使っているようだ。なのはの話によると、ＡＡランク魔道士の技術のようだ。

ティアナ「ヴァリブルシュート！！」

膜状バリアで包んだ魔力弾がものすごい速さでガジェットに向かう。ガジェットがＡＭＦを使い防ぐ。膜状バリアが消されたが、本命の弾は見事にＡＭＦを突破し、そのまま二機破壊した。

今回のミッションは、無事にクリアした。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

十話　最初の模擬戦（後書き）

次はファーストアラート

十一話　ファーストアラート（前書き）

結構量がいった～

十一話　ファーストアラート

～ｓｉｄｅフィア～

機動六課が始まって今日で一週間がたった。ＦＷ陣は、今日もなのはの訓練を受けていて・・・私は平気だけどほかのＦＷ陣はちょっときつそう

なのは「はい、整列」

上空にいるなのはが、ＦＷ陣を集合させた

なのは「みんな、まだ頑張れる？」

「「「「「はい」」」」」

全員同じ返事をした。

なのは「じゃあ、シュートインベーションをやるよ。レイジングハート」

なのはが次の内容を言い、レイジングハートを呼ぶ。次の瞬間なのはの周りにスフィアが展開される。

なのは「私の攻撃を五分間、被弾なしで回避しきるか、私にクリーンヒットをいれればクリア。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。がんばっていこう」

再び返事をした。

ティアナ「このボロボロ状態の中、なのはさんの攻撃を五分間かわしきる自信ある？　」

ティアナの中では、既にクリアの方法は決まっているようだ。

スバル「ない」

エリオ「同じくです」

フィア「広範囲殲滅かけていい？」

スバル、エリオ、私はそれぞれの意見を言う。え？なんで広範囲殲滅かって？もう疲れたんだもん

ティアナ「フィアさんそれはだめ！なんとか一発いれよう」

エリオ「はい」

スバル「いくよ、エリオ」

エリオ「はい、スバルさん」

その様子を見ていたなのはは開始の言葉を言う。

なのは「準備はＯＫだね。それじゃあレディーゴー」

なのはが、腕を降り下ろした瞬間スフィアが向かってきた。

ティアナ「全員、絶対回避。二分以内に決めるわよ」

やる気の声を上げ、全員スフィアを回避する。

スバルの魔法、ウイングロードが発動しなのはの近くの空中に青色の道が表れそれに乗ってスバルはなのはに接近する。さらにその反対方向にティアナがなのはを狙っている。

なのははスフィアを使い二人の方へ一機ずつ向かわせる。スフィアが二人に当たった瞬間二人が消えた。

なのは「シルエット、やるねティアナ」

さっきの二人はティアナが作った幻。

次の瞬間、なのはの後ろに新たなウイングロードが表れ、それを使いスバルは接近して、右手をおもいっきり叩きつけたけどなのははそれを右手で防いでさっきシルエットに使ったスフィアをスバルの方に向かわた。

スバルは、なんとかそれに気付き、紙一重でかわす。

なのは「うん、いい反応」

フィア「褒めてる場合？」

なのはの上でレナを構えている私がなのはにいう。

フィア「焼き尽くせ！火炎斬り！」

炎をまとわせてなのはを斬りつけるけどシールドで防がれた。けど・・・

フィア「レオ！！」

レオ「グォォォォ！」

本来の大きさに戻ったレオが爪に稲妻を宿して斬りつける

なのは「甘いよ？フィア」

なのはは片腕をレオのほうに向けバインドを発動させレオの動きを止めた。そして私を弾き飛ばす。

今度は、ティアナの魔力弾が四つ表れた。

二つはなのはの方、残りの二つはスバルを追っているスフィアの破壊のためで、二つの弾を舞うようにかわすなのはだけどさらに上からのフリードの攻撃がきたから少し慌てて回避したようだ。

そして、エリオとキャロを見つけた。

ティアナ「（エリオ今！）」

ティアナが指示を言う。

フィア「ついでに！ピオラ！バイキルト！」

詠唱する暇がなかったので無詠唱でピオラとバイキルトを唱える

エリオ「いっけー！」

ストラーダから噴射されるエネルギーを使い、なのはの元へと飛ぶ。

エリオとなのはが衝突した。

エリオ「うわぁぁ」

エリオは弾き飛ばされたみたいで後ろに飛んで行く。そして慌てててなのはの方を見てるけど土煙が舞っていて確認できない。

スバル「エリオ！」

「外した？」

スバルはエリオを呼びティアナは結果を気にした。

土煙の中からなのはが表れる。

なのは「いたたた～、お見事ミッションコンプリート」

なのはを見てみるとバリアジャケットの一部に大きな穴が空いていた。

「「「「「やったー」」」」」

フィア以外のＦＷ陣は喜んでいる。エースオブエースに一撃を加えれたのは嬉しいみたいだね。

今朝の訓練が終わり一旦集合する。なのはは機動六課の制服に戻りそれぞれの良かったところを言う。

すると・・・

フリード「キュクル～」

キャロ「フリード、どうしたの？」

いつもと違うフリードの鳴き声にキャロが聞いている。

エリオ「そういえば何か」

フィア「焦げ臭い・・」

エリオと私も気付いた

ティアナ「あ、スバルあんたのローラー」

みんなの視線がそこを見る。そこには、嫌な音を出しながら煙を上げているローラーがあった。

スバル「うわ、やば！　あっちゃ～、しまった～無茶させちゃった」

なのは「オーバーヒートかな？　後でメンテスタッフにみてもらおう」

スバル「はい」

なのは「ティアナのアンカーガンも、結構厳しい？」

ティアナ「はい、騙し騙しです」

なのはが、二人のデバイスの心配をしていた。

なのは「みんな、訓練にも慣れてきたし・・・そろそろ実践用の新デバイスに切り替えかな～？」

「「「新？」」」

ティアナ「デバイス？」

独り言のように呟くなのは。・・・新デバイス・・・レナ以外は使う気ないんだけどなぁ・・・

なのは「それじゃあ、一旦寮に戻ってシャワー浴びて、ロビーに集まろっか。」

「「「「はい。」」」」

汗かいたからはやくさっぱりしたいなーとか考えてると一台の黒いスポーツカーが近づいてきた

ティアナ「あれ？あの車って・・・」

ティアナの視線の方に皆も向く。なのはにはよく見る車だったようだ。こちらに気づいたみたいで車の窓が引っ込み中が見えるようになった。

エリオ「フェイトさん、八神部隊長！」

みんなは車に近づく。

スバル「凄ーい。これ、フェイト隊長の車だったんですか？」

フェイト「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

はやて「みんな練習の方はどないや？」

ティアナ「頑張ってます」

ティアナが答える。

なのは「五人とも良い感じに慣れてきているよ。いつ出動があっても大丈夫。二人はどこかお出かけ？」

はやて「教会方面でカリムと会談や、夕方には戻るよ」

寮でシャワーシャワーを浴びているとキャロが

キャロ「えっと・・ティアさんの銃とスバルさんのローラーブーツってご自分で組まれたんですよね。」

スバル「うん、そうだよ。」

ティアナ「訓練校でも前の部隊でも支給品って杖しかなかったのよ。」

スバル「私は魔法がベルカ式な上に戦闘スタイルがあんなだし、ティアもカートリッジシステムを使いたいからって。」

ティアナ「でそうなると自分で作るしかないのよ。訓練校じゃオリジナルデバイス持ちなんていなかったから。目立っちゃってね。」

キャロ「あ。もしかしてそれでスバルさんとティアさんお友達になったんですか？」

ティアナ「腐れ縁と私の苦悩の日々の始まりと言ってちょうだい。」

スバル「えへへ～」

ティアナとは少し照れてるみたいだし、仲はいいみたいだね

スバル「さ、キャロ。頭洗おっか。」

キャロ「あ、お願いします。」

っとスバルとキャロのやり取りを微笑ましくみてると・・・

キャロ「エリオ君も一緒に入ったら楽しいのにな～。」

・・・キャロがとんでも発言した・・・エリオは思春期に片足突っ込んでるから恥ずかしいだけなんだけどなぁ

スバル「そうだよね～私も洗ってあげたいし。」

ティアナ「妙に大人ぶってるって言うか。成長してるって言うか。別に気にしないのにね。」

エリオ・・・ご愁傷様・・・ってあれ？シャワー浴びてる時間ずっと無言だったような・・・？

シャワーからでてデバイスルームにみんなでいくとシャーリーがまっていた

シャーリー「あはは～、えっとそれじゃ皆のデバイスを紹介するね。」

そう言って目の前のカプセルを開けるシャーリー。

スバル「わぁ～。」

ティアナ「これが私たちの新デバイス・・・ですか？」

シャーリー「そうで～す。設計主任は私。協力してくれたのは、なのはさんフェイトさんレイジングハートさんとリィン曹長。」

フィア「私の術式は特別だから変化はなし？」

シャーリー「はい、もう少しフィアさんのお父さんが組まれたミッド式を解析する必要が・・・」

エリオ「あれ？僕たちのストラーダとケリュケイオンは変化がないんですか？」

確かに見た目は変わってないからわかんないかなこれは・・・

リイン「ふふ、違いま～す。変化がないのは外見だけですよ。」

エリオ「リィンさん。」

リイン「はいです。二人はちゃんとしたデバイスの使用経験はなかったですから、感触に慣れてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけ渡してただけです。」

エリオ「あ、あれで最低限！？」

キャロ「本当に？」

リイン「みんなが扱うことになる４機は六課の前線メンバーとメカニックスタッフが技術と経験のすべてを集めて完成させた最新型、部隊の目的に合わせてそしてエリオやキャロ、スバルにティア、それぞれの個性に合わせて創られた文句なしに最高の機体です。この子たちはみんな生まれたばかりですが色んな人の思いや願いが込められやっと完成したです。ただの道具や武器と思わないで大切にそれでいて思いっきり限界まで使ってあげて欲しいです。」

シャーリー「うん、この子たちもねそれをきっと望んでるから。」

レナは勿論大切に使うよ？大事な相棒だしね

――ウィン

なのは「みんなおまたせ。」

そんな風に話を聞いているととなのはがやってきた。

シャーリー「なのはさん。」

リイン「ナイスタイミングです。ちょうどこれから機能説明をしようかと。」

なのは「そう、もうすぐに使える状態なんだよね。」

シャーリー「はいっ」

なのは「まずはその子たちみんな何段階かに分けて出力リミッターを掛けてるの。いちばん最初はビックリするほどじゃないから、まずはそれで扱いを覚えて行ってね。で、各自がその出力を扱いきれるようになったら私やフェイト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから。」

リイン「ちょうど一緒にレベルが上がってくってな感じです。」

スバル「出力リミッターって言うとなのはさんたちにも掛ってますよね。」

なのは「ああ、私たちはデバイスだけじゃなくて本人にもね。」

「「「「え！？」」」」

ティアナ「自分たちにも・・・ですか？」

なのは「能力限定て言ってね、うちの隊長陣はみんなだよ。」

キャロ「え～と」

スバル「ん～？」

スバルとキャロは分かってないみたいだね・・・これ基本だよ？

フィア「はぁ～スバルとキャロはもっと勉強するようにね。ようするにだ、部隊ごとに所有できる魔道師ランクの総計規模は決まって

るからだよ。」

スバル「あ～そ、そうですね。」

キャロ「あはは。」

なのは「簡単に言うと裏技なんだけどね。うちの部隊だとはやて隊長は４ランク、後は２ランクダウンかな。」

ティアナ「４つって・・八神部隊長はＳＳランクだからＡまで落としてるんですか？」

リイン「はやてちゃんも色々苦労してるんです～」

なのは「ま、隊長たちの話は置いといて今は皆にデバイスの話。それぞれ訓練データを基準に調整してるから違和感はないはずだよ。だから午後の訓練で微調整しよっか。」

シャーリー「遠隔調整もできますから、手間はほとんどかかりませんけどね。」

なのは「ふぅ、便利だよね～最近は。」

シャーリー「はい。」

フィア「ねぇ、なのは。その発言は年寄り臭いよ？」

なのは「え！？」

フィア「精神が疲れてるみたいだから一度好きなことに一日費やし

たら？あ、仕事はダメだよ？」

なのは「・・・分かった。この部隊が終わったら休暇とって休養する」

よっし、フェイトからひそかに頼まれてたなのはに休養とらせることが出来そう

っと、突然一級警戒態勢のアラートが発動した。

なのは「グリフィス君！」

グリフィス＜はい、教会本部から出動要請です。＞

はやて＜なのはちゃん！フェイトちゃん！グリフィス君！こちらはやて。＞

なのは「状況は？」

はやて＜教会騎士団が追っていたレリックと思われる物が発見。場所は山岳地帯辺境付近で移動中。＞

なのは「移動中！？ってもしかして。」

はやて＜うんレリックはリニアレールの中。車両は内部へ侵入したガジェットによってコントロール不能。ガジェットの数は最低でも３０体、その他の未確認タイプも出てるかもしれへん。いきなりハードな初出動や。スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フィアみん

な覚悟はええか？＞

「「「「「はいっ」」」」」

フィア「オッケー。」

はやて＜よし、いい返事や。シフトはＡ－３グリフィス君は隊所での指揮、リインは現場管制。＞

グリフィス＜はい。＞

リイン「はいです。」

はやて＜なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮。＞

なのは「うん。」

はやて＜ほんなら、機動六課フォワード部隊出動！！＞

「「「「「「はい！！」」」」」」

さて初出動・・・がんばりますか！

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

十一話　ファーストアラート（後書き）

次回　初の実戦！

十二話　初めての実戦（前書き）

すこしおくれた

十二話　初めての実戦

～ｓｉｄｅフィア～

ヘリで現場に向かってるけど・・・

なのは「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど練習通りで大丈夫だからね。」

そう言ってみんなの緊張を和らげようとしているなのはだけど

「「はい。」」

ティアナとスバルはそれなりに訓練校でもやっている分そこまで緊張は無いようだけどね

リイン「エリオにキャロ、それにフリードもしっかりですよ。」

「「はいっ」」

エリオとキャロがガチガチ・・・

フリード「きゅる～」

まあはじめての実戦だからわかるっちゃわかるけど・・・

フィア「エリオとキャロは緊張しすぎだよ。もうちょっと肩の力を抜いて？」

「「は、はいっ」」

だめだこりゃ・・・

フィア「エリオ、キャロ。」

「「は、はい！」」

フィア「こら、敬語」

といいながらちびっ子たちの頭を撫でる

フィア「落ち着いて・・・ね？今回は私はライトニングだから、サポートするよ」

なのは「まぁ、今回は私やフェイト隊長、リィンがちゃんとフォローするからおっかなびっくりじゃなくて思いっきりやってみよ。」

「「「「はい。」」」」

さすがなのは。皆の緊張をちゃんと取ってね。キャロを除いてだけど・・・。

キャロ「・・・・・。」

フリード「きゅる～。」

フィア「・・・大丈夫？キャロ。」

キャロ「あ、ご、ごめんなさい。大丈夫・・・です。」

この子は、どう見たって大丈夫じゃないでしょうに・・・

フィア「ねぇキャロ。」

キャロ「はい？」

フィア「なんで一人で抱え込んでるの？何が不安？」

そうやって聞いてみたけど・・・たぶんはなしてくれないだろうなぁ・・・

キャロ「・・・・・。」

やっぱり・・・

フィア「言いたくないならいいけど・・・もしキャロが自分の力を信用で来てないっていうならそれは間違いだよ。キャロの力はすごいんだから」

キャロ「で、でも私みなさんみたいに戦えないしそれに・・・」

フィア「それに？」

キャロ「・・・私自身まだちゃんと力の制御が出来てないんです。」

「「「？」」」

キャロ「私の魔法の召喚術で“竜魂召喚”って言うのがあるんですけどこれを行うとフリードが真の姿に変わるんです。」

フリード「きゅくる～。」

そう言ってフリードを抱きしめながら話を続けるキャロ。うーん小さい頃からかな・・・これは・・・

キャロ「でも私はその力の制御が今まで成功した事がないんです。だからもしかしたら私のせいで皆さんの足を引っ張ったり最悪傷つけるかもしれない。それがすごく不安なんです。」

フィア「やっぱり間違ってる。」

キャロ「え？」

フィア「まず第一に、お前はお前自身が足を引っ張ったり誰かを気づ付けたりするのが怖いって思ってるみたいだが、それははみんな同じ気持ちさ。」

キャロ「・・・・・。」

フィア「私だってもしかしたらミスするかもしれないし、私の判断ミスで仲間が怪我を負うこともあるかもしれない。でもね、そんな時フォローしあったりするのが仲間やパートナーってものでしょ？」

キャロ「あ・・・」

フィア「そして第二に、キャロは私達みたいに戦うことが戦いじゃないよ？」

キャロ「？」

フィア「お前は私達をサポートするのが戦いだよ。私達みたいに敵の数を減らしてくんじゃなくて、私達が戦いやすいようにフォローしたりすること、あ、それとね？この能力はなのはやフェイトにも

ない能力だよ。・・・だから、そう自分を過小評価しなくてもいいとおもうよ？キャロの力は皆を守る事が出来る優しい力だから。それに私も小さい頃はレオの制御が上手く出来なかったし・・・」

そう言いつつ私はまたキャロの頭を撫でる。最初は恥ずかしそうにしていたが馴れてきたのか気持ちよさそうに目を細めるキャロ。・・・んー大丈夫そうだね。

―――

私達がそう話をしてるとロングアーチとフェイトの通信をキャッチした。

なのは「ヴァイス君私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を押さえる。」

ヴァイス「ウィッス、なのはさん。お願いします。」

なのは「それじゃちょっと出てくるけど皆も頑張ってズバッとやっつけちゃお。」

「「「「はい。」」」」

ハッチから飛び降りるなのは・・・飛び降りた？そのまま変身してるね・・・危ないのに・・・

リイン「それでは今から作戦内容を説明します。任務は二つ、ガジェットを逃走させずに全機破壊することそしてレリックを安全に確保すること。そして今回はスターズとライトニングに分かれてガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かうです。」

リイン「そして今回レリックがあるポイントはここ、7両目の重要貨物室、スターズかライトニング先に到達したほうがレリックを確保するですよ。」

「「「「「はい。」」」」」

リイン「で、私も現場に降りて管制を担当するです～」

―――

現在地はなのはとフェイトが空のガジェットの破壊をしている空域の降下ポイントに到着。

ヴァイス「それじゃ、新人ども隊長さんたちが空を押さえてくれるおかげで安全無事に降下できるぞ。準備はいいか！」

「「「「はい。」」」」

スバル「スターズ03スバル・ナカジマ！」

ティアナ「スターズ０４ティアナ・ランスター！」

「「行きます！！」」

そう言って飛び降りる二人・・・だからなんで飛び降りながらセットアップ？危ないのに・・・。

ヴァイス「次！ライトニング、チビども気をつけてな。」

「「はい！」」

・・・そう言って飛び降りる（もう突っ込むのやめたよ）体制をとってるけどキャロの緊張がまだ解けてないみたいだね・・・

フィア「ねぇエリオ、私ね高いとこは苦手だから一緒に飛び降りない？」

エリオ「あ、・・・はい！」

フィア「キャロもよ。」

キャロ「は、はい！」

そう言ってキャロとエリオの手をつかんで・・・もうどうにでもなれ！

エリオ「ライトニング０３エリオ・モンディアル。」
キャロ「ライトニング０４キャロ・ル・ルシエと、フリードリヒ。」
フリード「きゅく～」
フィア「ロングアーチ０１フィア・クローディア。」
「「「行きます！」」」
フィア「レナ」
エリオ「ストラーダ」
キャロ「ケリュケイオン」
「「「セットアップ！」」」

セットアップが完了して車両に降りた私はまずエリオとキャロの服装がかなり変わってるのに驚いた。私は変わってないけどね

フィア「エリオ、キャロ・・・その格好。」
エリオ「え、これは」

リイン「デザインと性能は各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ。ちょっと癖はありますが高性能です。」

「「わぁ～。」」

うんうん、子供はやっぱ笑ってないとね・・・敵さんが来たみたいだね

フィア「エリオ、キャロ感激している暇はなさそうだよ。」

ズドォォォォン！！

フィア「レナ、数は？」

レナ＞＞前方だけで5体、奥に7体と大きな反応が1体です。＜＜

フィア「了解。エリオ！私とお前の2トップで行く！キャロ、フリードは援護を頼むよ！」

「「はい！！」」

フリード「きゅく～」

フィア「行くぞ！レナ、ピオラ！火炎斬り！」

私は動作なしでの高速移動でガジェットの集団に突撃する。

フィア「ハッ！！」

ザシュ！！ズドォォン！

フィア「まず二体！！」

キャロ「ケリュケイオン威力強化。フリード、ブラストフレア！」

フリード「きゅく～」

キャロ「シュート！！」

ズドォォォン！！

キャロとフリードによるコンビネーション攻撃で一体撃破。

エリオ「ストラーダ！行くよ！！スピーア・アングリフ！！」

ズドォォォォォン！！！

エリオによる突撃攻撃でその場にいるガジェットドローンが全機破壊された。

フィア「奥へ進むよ」

「「はい！」」

―――

それから私たちは危なげなくガジェットの撃破に成功したけど・・・

エリオ「あ、あれは！！」

フィア「新型か・・・！あぁ、もう！」

キャロ「フリード！ブラストフレア！！」

フリード「きゅく～」

キャロ「ファイア！」

ズドォォォォン！

しかしガジェットによるアームケーブルによってはじき返された。
エリオが攻撃をするが・・・

エリオ「おりゃーーー！！でや！！」

ガキン！！

エリオ「く、堅い。」

いとも簡単に無効化、さらに離れていたキャロの魔法陣まで無効化した。

キャロ「こんな遠くまで！？」

フィア「エリオ離れて！！行くぞレナ！！」

レナ＞＞了解です！マスター＜＜

フィア「ホーリーエッジ！！」

ガゴン！！

私のホーリーエッジは当たったけど無効化され、さらに照準を私に向けレーザーを発射する。

フィア「！！ＡＭＦ自体も強力になってる！・・・なら！エリオ！同時攻撃！！」

エリオ「はい！！」

フィア「ピオラ！スピードで撹乱いくよ！」

エリオ「はい！ソニックムーヴ！！」

私とエリオによるスピードでの撹乱攻撃・・・だけど

エリオ「ぐ！？」

フィア「堅すぎ！一切攻撃が通らないなんて！」

そこで、エリオに一瞬の隙が生じた。アームケーブルに捕まりそこ

から崖に放り出される。

フィア「エリオ！？まずい！！」

私がエリオを助けに行こうとするがそこに行かせまいとレーザー攻撃がフィアを襲う。

フィア「くそ！！このままじゃ・・・」

ってキャロが飛び降りた！？

キャロ「フリード、ごめんね。今まで不自由な思いをさせてきて。私ちゃんと制御するから・・・大丈夫だよ。だって私の力は、優しい力だってフィアさんが言ってくれたから。・・・蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！」

フリード「ギャオォォォォォォ！」

一一一

キャロが竜魂召喚に成功したようだね、・・・だけどなんでエリオとキャロはお互い向き合ったまま顔を赤く染めてるの!?こっちは一人で大変だって時に良い雰囲気を作っちゃってまぁ・・・

キャロ「フリードブラスト・レイ!」

キュイィィィン

キャロ「ファイア!」

ドォォォォン!

直撃しかけど・・・これで終わるわけないよね・

キャロ「やっぱり堅い。」

エリオ「あの装甲形状は砲撃じゃ抜きずらいよ。僕とストラーダ、そして・・・」

フィア「いや、私も補助魔法を使う!キャロ、エリオ。」

キャロ「はい、我が乞うは、清銀の剣。若き騎士達の刃に、祝福の光を。猛きその身に、力を与える祈りの光を。行きます！エリオ君！」

フィア「かの者に火の加護を！バイキルト！」

エリオ「了解！フィアさん、キャロ。はぁぁぁ！！」

キャロ「ツインブースト！スラッシュアンドストライク！！」

キャロの補助魔法がエリオのスタラーダに付加する。これなら・・行ける！！

エリオ「はい！ストラーダ！！」

ストラーダ＞＞了解！カートリッジロード！！＜＜

ガシャン！ガシャン！

エリオ「一閃必中！でやぁぁぁ！！」

ズドォォォォン！

エリオの攻撃がガジェットを貫いて破壊した。

エリオ「やった。」

フィア「ふぅ、よくやったなエリオ。キャロもおいで」

そう言って私はエリオの頭を撫でる。

キャロ「えへへ～」

エリオ「は、はい。ありがとうございます！」

うんうん、やっぱり子供は笑顔が一番だね。

十二話　初めての実戦（後書き）

うーんいいところで切れなかった・・・

スカさんのところ忘れてたぜ・・・w

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5807x/

・・・リリなのの世界に転生？リリなのってなに？

2011年12月11日14時58分発行